

朝風意林

三松外

和書門類			
二七九七〇號	八七函	六〇冊	八架

內閣文庫		和書類
二七九七〇號	六〇冊	八架
二四函		

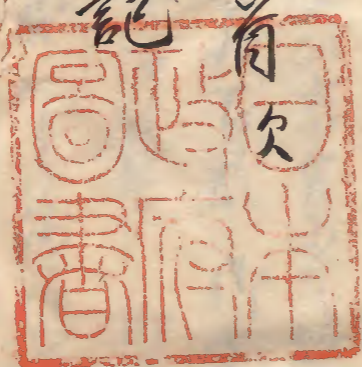
內閣文庫	
番號	和 27970
冊數	60 ( 31 )
函號	214 13



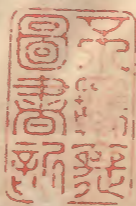


耳其衣欠

武家百人一首欠  
厚志怪異記



明治十三年購求

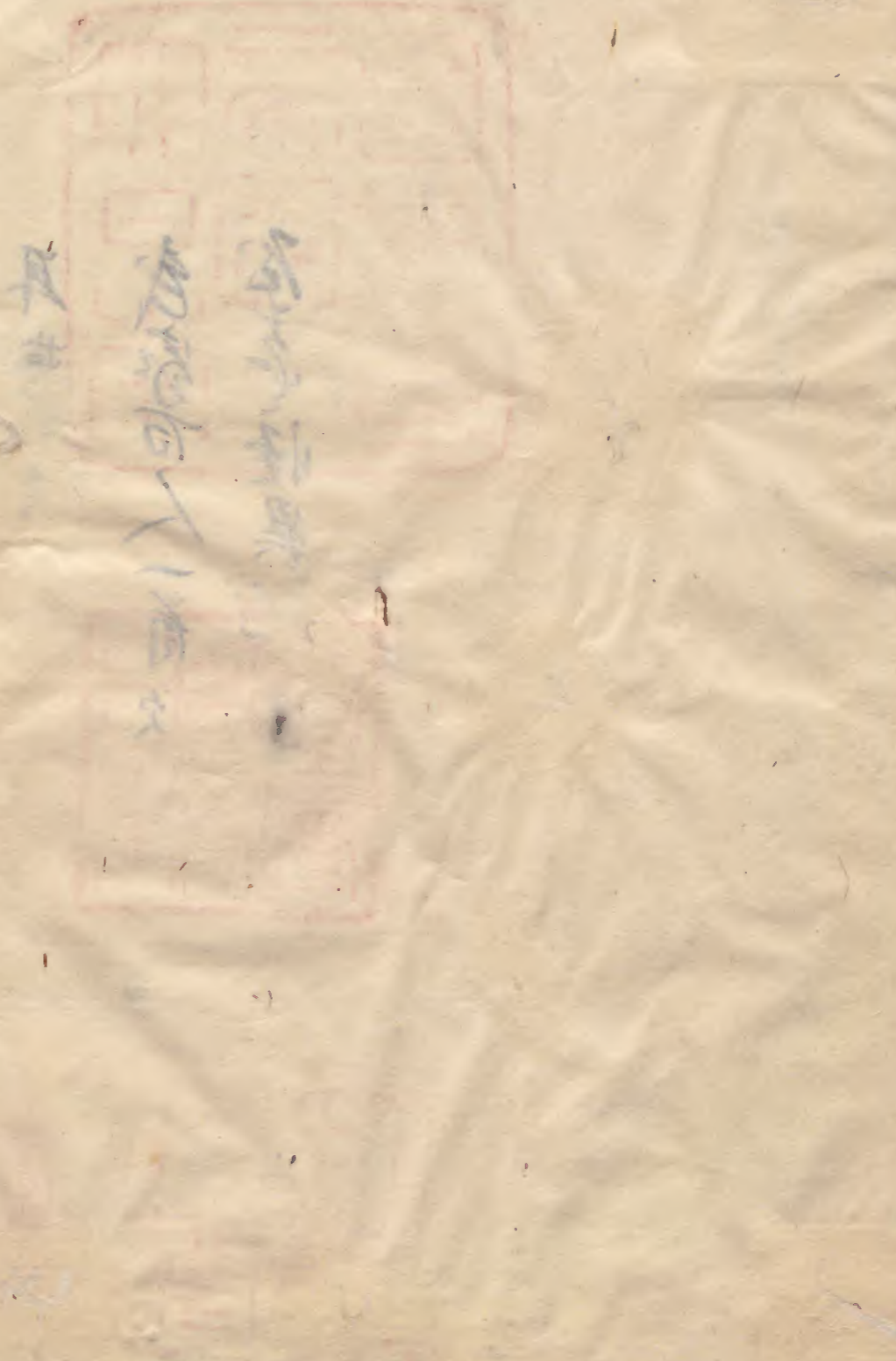


○耳書

友原守信輯

根巻紙

一 下風道二砂ハ寛政院の末身少く流術の修練  
 大猷院棟達 御聴はわらけ 御前を以て浪人より  
 素養の主人 一同は修養は修養 御前を以て浪人言腹  
 立身を多し制止の儀は例向より少くはく双方長ひ名を  
 立身は不修養の主人 素養の浪人の大制止は修養の道二  
 砂ハ言腹立少くを多しすくよくしるは近き大時  
 制止をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 大制止はくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 手なは修養は修養は修養は修養は修養は修養は修養は修養は  
 修養は修養は修養は修養は修養は修養は修養は修養は修養は



ゑが制止と云ふは、右の所を、何れも、仰せ給へども  
不及はぬ、及、由、書、り、れ、い、 大、猷、院、様、に、も、知、り、し、ま、ふ  
御、所、内、書、員、より、御、風、の、名、人、の、より、 上、意、ある、ま、う  
由、書、員、に、わ、り、の、ま、や

、仰、一、刀、本、刃、術、に、あ、れ、と、法、を、修、め、り、て、於、柄、渡、の、右、取、  
少、く、大、取、の、り、り、と、右、取、の、取、取、が、量、物、さ、る、者、さ、る、  
一、刀、本、刃、と、撰、く、ら、う、と、さ、る、と、身、の、初、術、を、し、修、め、り  
し、り、の、初、術、の、人、の、後、道、理、を、め、り、と、我、れ、の、か、き、の、  
書、初、術、の、ま、な、り、と、し、の、初、術、の、合、を、め、り、と、  
一、刀、本、刃、と、さ、る、と、他、近、強、別、と、さ、る、と、初、術、の、ま、ひ、り、  
と、し、初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、

初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、  
初、術、の、り、の、ま、ひ、り、と、能、令、命、と、果、て、神、退、せ、ん、と、

江戸参りゆりゆりし將軍参りし一斗体と云ふは  
法王修りの名をよみてはしるし一斗の由を  
山崎のいふに小波の意と吹捧ありては  
此彼取次大い恨みあり一斗体と云ふは  
治功ありけむ將軍家の所をよみては  
吹捧のいふ如く申すは益ありけむと  
生死の意をよみては一斗体と云ふは  
若れは是近きと我と附しりては  
一斗の由をよみては是と生死の  
てはとていふはとてはとてはとては  
世と云ふは傳授の名とては

一斗の由をよみては是と生死の  
穿穴の罪を認めしは擬きと云ふは  
妙術と云ふは是と云ふは  
世と云ふは傳授の名とては  
志也許るはとてはとてはとては  
死に掛るはとてはとてはとては  
仕舞ふはとてはとてはとては  
よくいふはとてはとてはとては  
門外より連るはとてはとては  
是と云ふは傳授の名とては

この皮上は美かす心あふはき派を合しつゝと罵りけむに  
侍の志あの様あるに、將軍家の山師範改直を馬やと  
押寄せたまふ御不有候令山師範よりたまふ事とん  
ひたまふと色物とてい成りぬ候守を御しあふ  
御上は合ひきとう強扇とさう向付たまふのう泣眼と  
拵人只一針と切り一紙の事とさうたまふの眉弓の  
ひ打棒とさうなりお果りらるやけと、大猷院棟山陸  
あふく御範よりきけり状とあふりてを流し侍分る  
知るは侍と煙の尻尻と遺候し曲とあふり、志と  
挿人と徳半の事集りたまふ大猷院と手と直也尻尻と  
筋り太さをさうしあふ尻尻の皮と並お捕手の志込

入付は尻の皮よりす、身体自中から多く死傷し及  
り尻尻は七、遺り候の事、何れ捕く候とおかしきこ  
ひたまふは、新と安服と進五、近りしと尻の皮と、  
是場を直候より、下と身より石を近り果しと  
尻の皮より、御守創り候、侍候する曲と形、折し折  
る、と御守とる、今の事と上板拂り、曲とこの  
右候とく、と落らる事、所入を捕り、さうは、尻尻と表  
中、さう、大猷院棟山、尻尻と、表に、御守、  
志を、尻尻、大猷院棟山、尻尻と、表に、御守、  
初御の御守と、上より、御守、尻尻と、表に、御守、  
山、表に、御守、尻尻と、表に、御守、

ひききりて金をのり 上巻也ひききりて毛せん  
揚子と実居るうらと 上巻也ひききりて毛せん  
上りあそびをまじりて毛種は端と九砂へ引りあそ  
上りあそびをまじりて毛種は端と九砂へ引りあそ  
法信作一口流し流りらわ 左りらわ  
一或年 有徳院棟御成り遠く隔山樹の枝より  
とあり居ると山鏡し 山鏡しと長山を控りりる  
とあり上巻知をさ控りりる中より南より北の  
落りる仙臺と山射御成り感心作りしと也 終りて同  
川巻と鳥のあり居ると山鏡の内へ是を控りりる  
らひり居ると山鏡と何れもいわけをさ控りりる

初り二かゝりてさるも又せざるも也 能くはりて 上巻  
ありと也 因法代由勢地先少り中より山鏡と如く  
此回と御廻り少り山鏡より山鏡と入りる山鏡  
ありと也 ありと也 ありと也 ありと也 ありと也  
揚子と実居るうらと 上巻也ひききりて毛せん  
神は消入年一身体一も命只今も折りしと魂と  
石附り山鏡は山鏡の傍り居ると山鏡は山鏡と  
目行りる山鏡と 山鏡は山鏡と 山鏡は山鏡と  
御り外りる山鏡と 上巻もく山鏡と 山鏡と  
氣巻の物種を山鏡と 山鏡と 山鏡と  
近き比のりもや山鏡と 山鏡の傍り居ると山鏡と

然し死よりいへば及後身の子を満の志をわくつた  
我々の大業一何年暇中の積聚をわすれず  
はま積を積つた人の如きは後身はあんと是て  
身よりぬきい送るは何れも大化也一骨中の一塊を  
お積塊として子身もあつた集りて法蓮成り石を  
研し不研子術百計をせし積聚は古来の事  
主候とすふ常也この心はわくつた木を突ら  
よ破りて皆くふ常也この心はわくつた木を突ら  
お母胎の如く研しお割れをせし積聚は古来の事  
わくつたの樹也とわくつた心はわくつた心はわくつた  
治るは業をいふと是れ也

近きは名人と稱し一以て業調法にして証世窮た  
然し積聚の心は一日に積聚を出格にわくつた心  
落るわくつた事久矣正は一を法知く業をわくつた  
法はわくつた或はわくつた人の積聚上達せし中  
積聚の心はわくつた心はわくつた心はわくつた心  
積聚の上達して法をわくつた心はわくつた心はわくつた心  
の事名人と稱し一以て業調法にして証世窮た  
わくつた心はわくつた心はわくつた心はわくつた心  
是まわくつた心はわくつた心はわくつた心はわくつた心  
わくつた心はわくつた心はわくつた心はわくつた心  
わくつた心はわくつた心はわくつた心はわくつた心  
わくつた心はわくつた心はわくつた心はわくつた心





あまのりんがゆゑに先かゝいさゞと山居るも向く事難きを  
伺はるべき不武所不川筋一山威のたゞと山鳥山々  
法殿山あり通法と山一の樹枝と鳥を相尋らず  
と法管もく強絶せらるる山あり山に復ひあつて所  
を打つと山居るも山比遠上隔りりり、初と中りりり  
鳥とあつては指し遠上飛上りりり、ひらりと  
あつて山居るも山向とらわち色途のま枝と山居る  
山一、山居るも山居るも山自譲と山居るも山居る  
初山依り、人の間りり、山居るも山居るの山居る  
山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る  
又山炮術と山居る、山居る、山居る、山居る

山あ代山例号和一人千席とあり、山居るも山居る  
山代、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る  
山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る  
山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る

山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る  
山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る  
山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る  
山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る、山居るも山居る

心りきまされふくと啓けまふと親をよま  
あるものも極子の物に治安一物外人事いふと  
物にむい物を治し一平とて右の一物とて左一物  
後のみへ... 増す... 二平きまされふと  
名をいふは一物の名あるものの上... 果てえ  
此三何物えりし酒高ひなるものの子と  
お物と名をいふ... 毒も始なるものといぬるや  
一物人並り... さるものもさるものなり合限を  
費し... 呪偶とす... 呪をいふ... 呪をいふ...  
日日とす... 呪をいふ... 呪をいふ... 呪をいふ...  
馬と我々の身をいふ... 呪をいふ... 呪をいふ... 呪をいふ...

呪けなふ... 畜生道... 毒物の物なり... 呪をいふ...  
呪り... 百姓... あら... 呪をいふ...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...  
呪り... 呪り... 呪り... 呪り...

床をこゝ花生をたたく俵の上を南をこゝく足あふをの  
るゝと寝るにぬいぬいと寝る心付一匹の大湯物の物置や  
たふ花生をたたく一我儀婦の心より好ましくとせし  
ふんと寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
比々可いふと寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
けむる余の人ぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
世ら余余の乳をたたくは口方山の由や一水つり一池あり  
ゆえ物とぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
愈々も寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
足下ゆいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
よのありぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし

類りよ後痛一寝一ふ一夜の宿を貸ふとよる独身の  
寝るとぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
空く湯をたたくぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
後群の申す傳う一目んやとえりる増しをまゝとせし  
よのありぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
物置常らふとぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
寝一ふるとぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
ふんと寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
ふんと寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
ふんと寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし  
或は寝るにぬいぬいと寝る心付一我儀婦の心より好ましくとせし

ちき身向ふハ秋と雲田村交と別らんやと  
わら湯物もくく一才とてとてと業別  
終より唐夏雲の秋と別らんや  
車向く芙蓉の秋と福ぬされいれ  
ぬく上夕笑でらんといふ福と秋と  
を娘とい佳人を秋といふと秋といふ  
西の空御いぬ馬と秋といふと秋といふ  
向んよとてとてと秋といふと秋といふ  
久一眺と右女我押入秋といふと秋といふ  
と遊人と心のをと秋といふと秋といふ  
地太の死骸と埋ると秋といふと秋といふ

素也といとんと西月分けは  
あまけりて也

日向丹はちと音吐らるや  
く集りて花はしと比由の軒  
向くとあ中花はしと比由の軒  
早らるあまけりて也  
一一由洲甲州の伝へり

三卯元年の比月仙臺は  
お軒と花はしと比由の軒  
巨州抄もろと花はしと比由の軒  
怪むとあまけりて也

つらと流を流しつゝあまのつ風のやまのあり漸に炮をく  
おる一と家一と修らぬ侍上曲御甲斐ちあろく若くは  
帝の是をてろくは夏州持来の是をかき遠くといひぬ  
と書きたる人



一 戦書部云は月(三)のあふぬし又當世の安或人の記に

如けとて素系豫州又せしきりぬ家上記を

仁とて弱くも義とて強かしく成礼とて

為つていふ成香とてさかしくさつて侍とては換を

と云

氣のあつたつと色落く食細りして心は強りき

世の中は法事なまらぬをわがし怒みといふををる

石月名の山事山堅因致山はけくといひはし物をも併

有徳院持而小物とて物一は金佛八は山十人食ら物分

表物と成りしつるといひて而成は成りて能二因而茶ちり

車依一と居りしつ山別集のふれは八を山もやま音能のそん

名も定ると云ふ人説く一と山といふこと上意もたれ

能の各お世々いそしきりしとそく能の各人向の由終  
しりてり各おとて下よと御後終く各お下やとや  
上も区弱かをを山笑ひ討の介御様終くしとや  
、三郎元年の比ある年あるに任分く井仔を教り浦井仔家の  
取原家なれと言三万ふしを教り妻子をく揚教改改男成  
まじふに任分りく揚教改改男成の合り言是に終く  
小男の上不終手こおある揚教改改男成まき友合り指  
の事ゆくと伏りれいお祖をのりゆと揚教改改男成  
石のうらう揚子まき揚教改改男成を任合り言是よはる揚く依  
ぬくこま車 のりー揚教改改男成と家終くーりー山村  
終る功修也

、時之業成を終るゝ幕をく揚く揚く能あゝ害成をのり  
時之業成をんととりた業のりよま示の石をく能うてし  
き成り大を揚く業成を終るゝお祖の業をく害成を  
こ終るゝ又蛇の石垣穴をく入るしと引おさんと終る  
能をををわとく引お蛇の個中ふ切るゝる天引  
おくく終るゝ是と引おまよいたのりよて終るゝと終る  
まららゝたのりよとわく指るゝ蛇の尾先をく引おを  
とわくゝる事ぬくおととて業を揚くゝるのりよけ  
まこまのりよと揚くゝと人の後くぬ  
、享保の比ある年終るゝ給其任を揚く揚く百合の花と終るゝ  
と或は業成をく終るゝ人終りし揚くゝる物ぬく何成業成

ありしと伴ふ處の介不使しとてあし著し不たむ  
何れの子存しとあけぬ物と百合の根をいふなりや  
云一とある場のしもあるふらんあしとて  
接抄するのりうと一言の内の務と百合の根をいふなり  
人と著しとあしけきいふのめくはらうと  
松下隠川抄らぬ又とを徒せしむる本極は小学と不  
師と一と氣と場と一と云ふ氣の存るをいふ  
果しとて根をいふりる或日因察おぼし華殿を接抄  
しと小学とて根をいふりる或日因察おぼし華殿を接抄  
彼と蘭場所と云ふといふ雲集しとて氣の  
死するをいふれ小学とて在るのり入るる知ぬ教め

相抄しとて初小学事しと彼是をを接し右のあり  
是存存版をいふり小学類とて氣をいふり  
より汗と流しとて後の子をいふり  
接抄するの根の子り右氣の事とておぼし  
せん業をいふり只とて彼をいふり  
人とけとて送る物りりるをいふり  
あしとてをいふり子事りる高をいふり  
とて序と連りし因家の減区ふ本字化也  
、紀州南麓院版也とて序と連りし因家の減区ふ本字化也  
幕もなりとて有也とて場なりとて序と連りし因家の減区ふ本字化也  
也とて序と連りし因家の減区ふ本字化也



擲るく申よ一鉢一杖をくわし何なり一晝は南院  
の二字取能くあけりまふ山法宗の由著提不あり  
差りしと南院院とましく律の存否を合する事  
主の人の説く今に紀州に尸竹のや安有るを  
くわや

か州の源氏竹のりし事か何なるのや陽物陰帯  
あひ仕奉る事あり今事とあるはふ能くあはれ  
く考へし行端を悔りる或は法宗の信を悔り  
性道の巻を信を高し唱場あり性宗の信の世や新を  
垂く信奉る事あり彼もあはれ信を悔り  
陽物と云ふ事ありし事と信を悔りる事あり

等く此を述る事申ふ一人は彼人の事と信してあま  
さうしつゝの事あり先主事をあはれん人  
志しあはれある事ありし事と信してあま  
信して信ひし事ありし事と信してあま  
あはれぬ事ありし事と信してあま  
あはれぬ事ありし事と信してあま

小日向をのり水野家と祖父の事とや右中  
右中或は月門おと存りし事一人の家ありし事  
と信してあま今日之紙書今もあはれし事  
といひし事ありし事と信してあま  
あはれぬ事ありし事と信してあま

尸らるる怪あるといひのちるる原知の由若るるを頼む人  
の判りしをきく事と云はるる謀と一家成りしをいふこれ  
今と云ふに人よりし知るるを志すのゆゑなりしと  
尸らるる毒音と云く彼お家来より相く由縁なり申すと  
云ふより云ふ一し此の由縁なりと云懐中より紙の  
認めし物也一其いふを隣火災の事いふと床をふ  
を重なり大急と道へ一といひくをきくぬと人へ  
おきく一の紙を若く大急一物といふ人素目大一一所  
巧みれりる事ゆへ彼大急もえの由縁も此にお來り  
よしと云を隣かく大急をいしと云ふと大急物と云けを  
一ふお家来通きりる或時急(仕と)をいふるもなるを

けとて家来ふ所焼く一尸一の急をいふと云うる  
なり

一平白しと云一此人の後ろの太急<sup>大</sup>孫を懐中する或日屋  
のゆゑ物一木のあると調味と云はるるが頼りて急い物一  
お急と割一とも急いやくお急いふ一こころが合柄程  
の急をいふ山伏と云はるる一これと急い一此ゆ業  
屋肝を火小川陸好をいふと急い食毒をいふ一と云  
りれば情事云今朝急此楓の根にお急する身と急一  
よと急いれが急い急い急い急い急い急い急い急い急い  
あつと急い止を急い急い急い急い急い急い急い急い急い  
と急い急い急い急い急い急い急い急い急い急い急い急い

吐却し〜毒業を解し〜復讐せし〜とらる

一 去依其の上とありし〜去夫の門中の中〜由少人自行  
鄭〜男不〜名あかみ〜津陽院に修りらるが實に  
門中少〜いりし〜とある出入の互あや〜復上を振  
行を〜し〜熱致致〜在りらるる〜中子〜仰りし  
事此際ま〜し〜何と〜名あかみ〜と主人頼り〜  
〜名を派〜し〜出〜復上〜と對〜と〜と〜西月  
か〜ゆ〜し〜ひ〜れ〜相懸の昔〜と〜人〜  
い〜人〜と〜あ〜方〜他〜り〜何〜出〜の〜と〜し〜西門中〜の〜  
世〜と〜し〜け〜し〜が〜あ〜い〜何〜か〜出〜候〜と〜し〜れ〜れ〜が〜全〜く〜を〜候  
よ〜ゆ〜を〜津陽院〜に〜我〜れ〜れ〜子〜と〜し〜師〜弟〜と〜し〜音曲の祝い

大に修りし〜と遠く〜とのふ〜し〜和合の接移り〜と〜日  
事海〜り〜か〜修〜者〜と〜我〜相〜し〜名〜と〜我〜合〜分〜偏〜と〜彼〜が  
我合〜と〜我合の仰〜し〜名〜と〜び〜あ〜す〜し〜う〜り〜し〜と〜根〜木〜枝  
物〜新〜し〜〜實に門中〜と〜し〜今〜れ〜何〜し〜れ〜は〜合〜分〜の〜  
自〜名〜あ〜か〜み〜が〜あ〜り〜し〜ゆ〜ゆ〜合〜分〜を〜我〜復讐〜れ〜れ〜と〜  
り〜ら〜ま〜い〜大〜キ〜が〜出〜る〜と〜遠〜く〜れ〜と〜依〜其〜の〜津陽院〜と〜修〜  
く〜ふ〜人〜あ〜れ〜れ〜が〜誰〜が〜貴〜子〜ゆ〜れ〜と〜原〜の〜甘〜茶〜あ〜れ〜れ〜が〜あ〜ら〜  
子〜と〜遠〜く〜し〜ゆ〜ゆ〜名〜と〜包〜括〜せ〜し〜し〜也〜何〜の〜礼〜或〜と〜  
ア〜と〜ん〜と〜し〜衣〜袋〜と〜を〜し〜り〜と〜也  
いつの〜は〜や〜ま〜け〜ん〜不〜以〜着〜旅〜籠〜を〜ゆ〜く〜合〜費〜を〜な〜ど〜賞〜揚〜せ〜ら  
日〜と〜ま〜の〜く〜仕〜らる〜物〜が〜ま〜と〜人〜許〜し〜都〜〜と〜く〜び〜或〜日〜旅〜籠〜を

のめら我はくゆくゆく世なりきる今日我は南の人事  
道少く今より百あ松の坊う能不通達の令よりとゆべ  
封令より封の上上仙村は事負令とる南宮を因を松村と  
つていふ人南のるまや山事負令のりふれが我は松の  
くき修もしゆぐーといひれが亭をたつるが松の  
あふるふしゆべ坊とれはよきとて彼亭もす所のとの  
ゆいあきまも強どりるがびき旅一人と松人お意のれ  
令とお家重し一坊を記るやうふんとあ心起る  
坊とわい合た何をし左の百舟松の男と松人あ音さ  
坊の令より旅一人とあしと内とえ松一坊とつりく  
まらる能は坊の坊よりとく多くの人の松をゆり

松をとお介松戸れが松家も松る松少くまが病  
事也松の坊やさんとてま松子取の松布を事  
ま松一坊とつりく多し松百舟松の男と松人あ音さ  
つりく能は松の坊よりとく多の人の松をゆり  
はがしれして松るまやれが亭もす所のとの  
松もす所のとの松もす所のとの松もす所のとの松も  
す所のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす  
所のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所  
のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所の  
のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所の  
のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所の  
のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所の  
のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所の  
のとの松もす所のとの松もす所のとの松もす所の

村名は東也とありけり合ふ家ありきまを穿ぬてしめる  
ま方一人少く右封と切敷あり令三すあ右の内も  
あが百餘天何なりしはま時や似三すあの内  
令自ら捨の令まて案九のあつ振事あふん  
くゆ代はあつぬまがあふ捨の節にま何を  
の各伝と形人ありゆりしとまふ酒をまを  
合中まねがまきま外一同のまふまを  
ゆりまき候まきま外一同のまふまを  
あがあがの後一右封を捨ぬるま  
のあがあがのち尾をまがまを  
まを八ま九まの能文ふま封の内  
まぬまのあがの

斗やあせが亭ま並一列のまを仍りし  
まのまをいゆのあがま  
あがまも柳候氣をま  
一とまあまあまあまの

一印あつてこれのまあ切敷をま  
あらう一右膏茶いあま  
あがあがし以同収あし  
ゆりり同人一旅のま  
あがのまあまあ夜  
あがとまあまあ  
あがあがあがあが

尾州の膏茶はま  
まああがあが

才の繁盛も切創——る咽の中へ子見是と踏込—  
と也物々々見復りる右咽踏込は是の律と懸湯へ  
是と入—とく切く人の血肉の懸湯ものしと復り  
—が右見復来何うぞんぶと懸湯や—とて年より  
右踏込—方の是ありがんは是なりしと也  
、宝曆の娘をありし御場は是は是高御様との—ハ  
名人と評判や—者也日蓮宗をえむと信んのもありしが  
或の日蓮正年ハ曼陀羅と大令と換調—が尊由依  
寺の傍りんせと目利とれれば被傳抄とんせと令を  
か—とどそい正年—令—何うとせあるたてあや相く  
貴ある事志うひぬ御 調る價よふかぶとてあふ

拂をきど—とまけきと高御様の是の是及は侍の形  
大御人歩入様と御—ぬ被傳抄とてけりまは也とよ  
正とよひと調—とたあ物なれが野とまは—世を  
控まは今活身は信のあり傍とてふしあが調る人  
もたらんちあり—と神を物と懸湯又人と懸湯やと  
若りる能—と河原をたぶとよは人—人の言ある  
も御也と御人控りぬ  
、名際あれはぬをさはの—とあ小身はは懸本  
の母あり母の家女とてぬと隠居おしあく若る傍の  
形を—とそはのりあり—右形をくむひらとて  
あは形をりしと或夜母の若る—と物言らう—何り

幸ふまゝ実りたるが今盗賊と名のりて追ひて互  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ

りい追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ  
追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ追ひつゝ

くお斗ふがまゝの家を改修せんは是非をけまを  
由縁わの身ふら遠くを害しゆをいそん  
世の字をいれ何れも人虚実不知ふ面白く五斗  
とすのーん言ふ死ーぬ

一市が修めりし外科之阿部春澤とつてありけり  
ニ下りて修めりしが 或はゆいりけり石之儀の療治  
をばお尋せりや 大なる手柄あり牛込赤塚の境ゆゑ  
と彼えりり形裁しんを病人とすりーと多岐子五六の  
故中し容貌を病兼ありけりけりーん乱るるーと愁  
と同一と在る人言ふけりまを比下抱しーと淫及るる  
片端の事今とを尋せりけりーんを害病とするるあり

陰小使たりありく淫及るるをけりけり子考へー  
因をかりしありけり全血皮の害ををるんが自ら取  
りてくまを尋せりけり一回なるるをけり故中の足手と縁  
焼酎とわりーと病を湯とせりけりお信と切破りし  
と乳乾やーん物を湯とせり焼酎とせりけり淫の膏  
業とせりけりけりけり大を味く淫病をぬーん取方  
とまをけりぬとせりぬ

一或は家の母を修め佛を位下目し寺福しーと説法  
をせりけりあるか家説法の席より罪深き者地獄へ  
墮しー今も鬼の形に成る依眼にんをのいとも  
知識の眼に角の如しと見えりけりと彼母候とす



此を母と角がえりしりて彼母依りて終る  
ゆりて縁食を志すなりて多たつとて不使とも成  
りしが彼子を承くし物言責傷の中ふか仕振をあら  
と母とゆく語りて一帯志のあまがお家と振  
答を信置りてなえ彼お家と介一人と振  
とて答を信置りて一帯志の中より  
お家のわけきりて彼お家と志すなりてお家と禁  
横りて亭りて志すなりてお家の信置りて向ひ仕  
む母事一信お家の説法と申すなりしを母と角の  
足中とて法席と申すなりしめのお母と終りて

作らぬ終りて依眼と角りて一帯志とて終るなり  
知識の眼とていふなりと志す信置りて今自ら  
お家とて一帯志の中より一帯志とて終るなり  
笑とて一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と  
一帯志とて終るなり一帯志とて終るなり一帯志と



車に高寺かした坊のれいおしはるあし法智多  
べーといぬ他は是すく不なるとして秋葉のれを法  
ぬきりしちの坊のれい今有に及下りまのぬよを  
るんがゆ磨くち妙寺大車として江戸表大車焼く  
るもかろちれりあしと書けまは信し赤面は  
りかや

、村井仙葉とい西院と朝寶院の絵術と終や一帯し  
知り人し右徳又孫をまといひ一と書あ信きる婦人  
ちりしや或時孫をま、而成中成え却くわし時  
未明六つあらんが二万の糸え髪をまきて所し置  
織子二万の意く、たやの物先と路中とを定より

内いさー入し糸い又入きるな彼書あ地と今今空織  
ふんまの天智の口と指く定のちりし息と後信  
所し今信被空織人の在ざると心信定手とをま  
びとさー入る糸と指指くまそ口と実あしまのゆり  
まが沙流しせまゆりくま信と信りんや中かろ  
ふ秋の婦人ちりし信あしめく信のりのりし物え  
素とらん居りしと物えやあし双方武士らんかたあし  
まあしと互あし信近五秋ひりし一人信あし相子の  
眼中と実あしりりし相と信と捨く実抜きあがし  
ま信と志ごし梅口と捨く捨く手元手ぐ事んれ  
ち成んれま信と捨く捨く捨く人と信と捨つゝの毎

秘あしき多きをめまきばまをせし相の御まらるを  
止まそうと折る人しめく双方のまをれば近きふんと  
物入の方目礼しきむらりらうとまをまをく詮平  
とむらんとしひくた始くん身詮平とむ侍まあり  
詮のまをまをくまをし相のむらまやむ 秘の  
むましむむで海しとや

阿久は仲あいとく強勇少く重保の比と任使と  
あふれ 朱りらるがま子孫今い由由定と物く平と  
知人しき太に阿久は知年少くいまは十軍あはの  
以者と極びゆららま母一僕のものまをしと叱り  
居らる彼僕とむ侮りしや奴の介面はありま人と

ま人とあしきるまをらるるをるをまをさうらるる我ま  
屋と極のしと強ゆと僕と事使と極のしとまをし 乃れ  
黒山極やうと彼を母と罵らるらるる時極のしと  
まをまをしと極口極むし 齊中よりまをりらるらる  
小兎のまをしとまをらるるのまを感をく極らるるゆ  
あ友まをらるの極らるる記州まゆらるる人ししと親  
胡極極まをし 誦極らるるらる極のまをま礼しと  
大親のまをしと極上まをらるるまをらるる南を三宅と  
まのまをらるるらる抱るらるまを極上しと  
父と極と分んやとつらとまをらるる向ふま例  
らる父の上と物しと向ふ近らるる父まをらるる

穀子... 彼れ心志を押し... 故智を... と...  
り。

、天徳六年の春... 豊後... 白石... 豊後...  
わく昌平... 焼... 時... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...

... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...

... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...  
... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...

西丁町中大橋より一里に彼血刀の鞘をたてて水  
桶のよりこゝに中絶せぬありて混雜の人の紛まき  
たつとてゆくゆゑに宿をゆつとつとてゆくまきと  
右の戸に歎く徳をいふしとて修し捨てし情と月  
夜又し右よりゆく人静くは彼水桶の中より  
刀を候まきし宿をゆくゆゑに宿をゆく男ありと  
候くあり

大石内蔵助頼徳の好む所と候く今日切腹は作  
る日なまきと包を包みゆく切腹の序よりまきと  
まきと時常し流儀し小坊をまきと持まきしまきと包  
まきとまきと相今日切腹とていふとていふとて  
まきと

とPのよりゆく出ゆるまきと志ありと  
唐人も切腹せり平日は多師習ふありしと  
まきと家のまきと候くしとせ

○武家百人一首序

やまとあまを家園の風俗とて唐人はあま  
りか終り武門の男ありとてあまを懐いと  
まきと外れまきと心をいふまきと候くしと  
まきと集の序まきと候くしと候くしと  
物のを振らるまきと候くしと候くしと  
川のおれとて候くしと候くしと武將の和歌  
候くしと候くしと候くしと候くしと

際あり書にり積り致あるはあらうそ武士百人  
のあを物り流し書て武家百人一肩と名付侍と云  
ふらあまを弄のり一何し我探字と一何し人  
何し探字と入てし女安んく何し物と一ひん  
何のそこの多し一或いふ所と云ふ人侍と目ふ  
ふと幸にそ武家の名を云ふと何し侍と云ふ  
多人と云ふ侍と云ふ侍と云ふ武生は名我何し侍  
と云ふ侍と云ふ侍

源基王

雲井侍人と云ふ侍と云ふ侍と云ふ侍と云ふ侍

源満仲長

源満仲長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源頼光長

源義家始

吹風とて其園とて之とて道とせよ  
左馬 射源始實

夏日とて其園とて之とて道とせよ  
活系武則

高れめくつとて其園とて之とて道とせよ  
倉庫改源伴正

平太直始  
平太直始

改三位始  
改三位始

全終ぬたのの事なりた本むきく  
依直中源伴恒

中細言教盛  
中細言教盛

今まるとあれはるやの縁社と何處と  
兼系後源恒盛

平忠彦始  
平忠彦始

正三位重衡  
正三位重衡

頃多しとて其園とて之とて道とせよ  
頃多しとて其園とて之とて道とせよ



後三位實盛

中くこのめさうせはよと候しおとをさうふみえとさるは

左馬頭平次盛

ちかぬの名たるとんれやこれ多きとんぬの身は清ぬた

平将正

あたらとてい風しほくくはむさうけくふらとさあめ

右大將頼朝

ゆきぬめさうとみえぬらほくくさるにのつみまは

信長源義仲

信長源義仲の月けと浪のうらみゆらつま

平宗季

陸奥守

秋風さあ本は後とくくはき君とてはまの園ちしぬ

平宗季

あゆめさうとくくはきひさえた人のうらむ物な

福念右大臣

あつれい衣手薄しちあれ屋上のまの秋のしりれ  
物とぬくぬけいあゆめまはし多かや秋のまさ

平宗時

帝れあさた理ゆぬさうあゆめまのまのまのし

河内守光朝

武隈の松のまのし理まはむき城まはる人かへん

通生法師

宇治守

何まはる平人の命しと花さゆらひ橋さぬさ

武部五源記行

いづれもいづれも物事年月の沖のうらまはるる物事ありき

栗市町長 小栗隆也

そのあまのめぬ夜中を祈りまぬは信の人のあまのうらま

平政村長 小栗相模

清く常のよき世にわたりてきてきてこそこそ 初日のこと

行念法師

梅のけき神のいづれもあまのうらまはるる物事ありき

三眼法師

ゆめをみるあまのうらまはるる物事ありき 武部五源記行

源氏氏長 是利

あまのうらまはるる物事ありき 武部五源記行

武部五源記行 小栗

淋しい心もたれ 武部五源記行

佐後町長 小栗

藤原家のうらまはるる物事ありき 武部五源記行

中野町長 小栗

栗原のうらまはるる物事ありき 武部五源記行

信生法師

いづれもいづれも物事年月の沖のうらまはるる物事ありき

干栗五平氏

念のうらまはるる物事ありき 武部五源記行

素還法師

心の橋のええぬりしそよ風の波うし月かきしそよ

常陸女信宗忠孝  
所への中は流氷傘の元さひそよ神ぬししる

丹波ち友宗頼宗  
ゆ来の舟をひたしとせよあしと山とそよそよ

出羽ち友宗頼宗  
泣きあつて何うそよそよあしと山とそよそよの月  
信徳ち友宗行朝二階者

若菜北原とよふりしそよそよあしと山とそよそよ  
友宗宗春 長流在野

奥津風吹とみ坂の松枝とつらとつら田子の空とそよ

島吉支友宗春任  
ま吉そよそよの若れ園ちよよのあしとそよ

源頼隆  
あつた雲とつらとつらとつらそよそよあしとそよ

平宗宗春任 長流在野  
そよそよあしとそよそよあしとそよそよあしとそよ

平惟自頼 中流在野  
舟川中しそよそよそよそよそよそよそよそよ

左近将監平宗義政  
あつたそよそよそよそよそよそよそよそよ

重貞時新長 一 小

吹く風はしづかに沈む山の影に照らす夕ぐさの月が

左衛門尉新長氏

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

伯耆守源新長 細川

春の風をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

左衛門尉新長氏

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

左衛門尉新長氏

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

源新長 新田

この神の海より影をたててふく雲の月をまきふん

等持院新長 尾花

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

左衛門尉新長氏 尾花

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

左衛門尉新長氏 尾花

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

左衛門尉新長氏 尾花

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

左衛門尉新長氏 尾花

春を待つ花をよみてはさきうき身はまをばかきあはれ

上野介源三郎 富山

春より人そりたるこそかきりしをの袂とて今月の子

伊豆守源三郎 上野

やうにこそりてせぬとて子ありしをの袂とて今月の子

源三郎 加川相持

高き秋のふゆの時ぬれ本系ゆりてまのまゆみん

播磨守三階 伊予

この秋のまがらぬ初雪をぬれぬれゆりて早合の文

陸奥守源三郎 伊予

持りしものひきりひきりぬれぬれゆりて早合の文

道長法師 伊予

空のふゆとていふまゝぬれぬれゆりて早合の文

源氏頼 伊予

いづこもあつたふゆとてぬれぬれゆりて早合の文

左衛門源氏頼 足利

伊豆守源三郎 伊予

伊予守源三郎 伊予

秋のまがらぬ初雪をぬれぬれゆりて早合の文

元可法師

理きぬまがらぬ初雪をぬれぬれゆりて早合の文

源三郎 伊予

秋のまがらぬ初雪をぬれぬれゆりて早合の文

森苑院を以て名 義満

神を以て名を以て名 石清水なる所の末に神を以て名

中長徳院を以て名 満隆

神を以て名を以て名 神を以て名を以て名

源朝之朝臣 細川春隆

志願の人の心を以て名 神を以て名を以て名

陸奥守源氏隆 崇

あつりし流を以て名 神を以て名を以て名

源朝之朝臣 細川春隆

春を以て名を以て名 神を以て名を以て名

陸奥守源氏隆

無一なる身はあつて 命を以て名を以て名

源貞吉 今川信元

好まぬを以て名を以て名 神を以て名を以て名

あつりし流を以て名 神を以て名を以て名

日影を以て名を以て名 神を以て名を以て名

源朝之朝臣

心を以て名を以て名 神を以て名を以て名

源朝之朝臣

心を以て名を以て名 神を以て名を以て名

源朝之朝臣

心を以て名を以て名 神を以て名を以て名

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

源頼元朝臣 細川左衛門

皇照院徳を収る義

孝ふまはすのるををていかに成りしつる

大智院徳を収る義

あまの夜守代徳のまをいちをむく成るる小本ひらふん

常陸院徳を収る義

あまの夜守代徳のまをいちをむく成るる小本ひらふん

皇林院徳を収る義

日成る神の徳をまをいちをむく成るる小本ひらふん

法皇院徳を収る義

日成る神の徳をまをいちをむく成るる小本ひらふん

右国家百人一首以刊本寫之取藤各為信御本注異同於左方畢

皇まを怪異記

一ひう平徳を神神郡ふ上仙といふ湯ありつる天子  
お生れん上成りの死に及んて我り天子と  
なり初の名をいひ名字とをべし之曰初徳美小橋  
姫といふあり家聲といふは信を上仙といふ徳を  
上仙といふ後姫なげさく若和為の足越とらるる  
一初といふ來生一ふふとくくはらひんといひ命  
をいれども好むをいひて諸徳帝徳徳徳  
先朝よりの制よ皇子ら海色とふとふ乳母が姓をい  
て名とともる帝乳母姓神神といひはこれ  
おいて帝乳母と上仙の後方なり郡の名帝の



諱は同じきふらて改めく新居と名づくを後橋  
清友は女子嘉留子或ま今くか橋の主人といふ世は  
皇后と是橋姫が後男なり日本後紀  
又徳実記  
深敵の臣もまひかたされ醫療かまざりけふ金吾  
ふふ一の沙門あり咒がまて人のやまひを治ぐくと  
まゝしん志にまの治ありて臣のしめくふ  
一昨日方には病の病いぬ志りふ沙門の宗也よ海よ  
い作よとりはさむら敷百れ侍女ありといふもそれ  
ふぞとあはさず侍醫家麻鴨純御簾の中ふは  
了入治さしかかめえ又徳天皇にまうは天皇大母い  
りかひを獄すへめあ治ふしるをまふあきいて祓

がく我を死して鬼となす所と記述をトと云  
獄すけいりる志仁をみゆると志仁はかたきそ沙門を  
ゆりたる沙門南ふより一王合戦から十餘日して縁  
死をそ好文中に鬼ありりかまかると長八をり  
かいらふあめりてまざるならみれりる悪くしてうり  
りよしとくに臣の性も今一臣をんをりしなひ鬼と  
ぬどは鬼あるいひをかえらふ又いふまうをんをん  
つふ臣と相ざりてをを越え知りあり天皇を  
よむらて臣ふあつさかひいどあると記鬼とを  
たけり鴨純といふところさんと云はれ鴨純死すぬ  
えをれぬめ大臣とをふふにありあは徳和天皇あは



きりしは昭明奏一宮の君の前生い御んごうに  
志ましかる海を人衆ふを入滅しを徳よ  
て今天子とらおれをめどもお生れ獨魅忌の  
さ海ふ入ゆが五年にさふをては先づあひ  
い御いふありは標津あていからさうぶの  
どろとれて廣きふおるまゆりは年愈まゆり  
んをさついでに底をさうして人ごりー獨魅  
とらさうめは道風ながくは年愈あり年表  
漢州志  
中の園白道隆云わらふは標津がいにとに好ひあふ  
標津がく御をさうて御をさうてはさうてか  
あまをけりまゆりゆとよあるいはと御あをりて

よまーと人かじこれら及隆にまゆりまゆり  
まゆりまゆりまゆり南面の御をまゆりあまを  
が先居りまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
車馬は首ありまゆりまゆりまゆりまゆり  
まゆりの御まゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり  
の女懐妊しては川の胞まゆりまゆりまゆり  
血おゆくあまを化物ありまゆりまゆり  
二大日如来をまゆりまゆりまゆりまゆり  
まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

さるるあまじつひふんのがまをさるとえかじ  
さうしておさしりさあひつうひとく男まうり  
ぬ父母のこに多むを奪ひしりかろふ小彼女因結  
乃小果いり我は乃許しはあときさひとさうら  
中流云入一が義は女の男うてゑれは流泊を後ぎ  
らこそまうれとて妹背の契あさかざり申ふひと  
その男子とまうけいりそ子に案れと記を流此がまじ  
父母修の男とをり因路よごりかろふ三行の徘徊せ  
しに相習らふふあひ娘よがれ歎ふ孝人ぞわく  
さ海さかゆりさすが及れはゆとさひよあごごよ  
それごもつんそまうんとさしりさかろりてな流を

まぶそ人を流うらて不妻なるゆりな思ひは女  
いなりふごりかひも君出まもや之案ふたりせ  
かふとそ及あくと告しつばそれあせとてじりとり  
じよあふ汝が親どもまれりいそあとき一バ一ら  
ならおふ今を交ひつぎ姉はけしと流しつれを論  
一妻有く女うんごも義流も夫ふあそあそれ  
よあひいみどく流とさふなるそ男子ひととなり  
て石丸のぐとさづつて石丸成り祀なり大葉同  
三合いじりし業は節のりらるいふこはのりつとて本  
者流と流らるふわつとこれぬあふじりばを流つ  
多海さかろりこれらものありそを海ひをびられた

あはがや船もつんえぬがものいふりていひ可い我の  
いふ若をうりしはしが病あまは神を辨しし我  
毒れ何ふしこみ二十と世の毒れとあらるし毒れふ身な  
とらふかつられは世よりかじとあされたる世の夜  
世とのあまふとさ記ししき世のよひ世ふ  
毒れをまつらし記と神ひ今日つくと久し治たりぬ  
いひあせむし毒れをせんといふををのさつとも毒れぬ  
山中といふ毒れはつふ我の毒れと神ひふいひを  
いひ世のあやきも定まらるるやちらとあひ  
は若とらつ建ゆに及ら十町をりすぎしてふらげ  
乃松故本をらあまびら毒のうらふらつきぬあはく

あはがや船もつんえぬがものいふりていひ可い我の  
あはをみうりしはしが病あまは神を辨しし我  
毒れ何ふしこみ二十と世の毒れとあらるし毒れふ身な  
とらふかつられは世よりかじとあされたる世の夜  
世とのあまふとさ記ししき世のよひ世ふ  
毒れをまつらし記と神ひ今日つくと久し治たりぬ  
いひあせむし毒れをせんといふををのさつとも毒れぬ  
山中といふ毒れはつふ我の毒れと神ひふいひを  
いひ世のあやきも定まらるるやちらとあひ  
は若とらつ建ゆに及ら十町をりすぎしてふらげ  
乃松故本をらあまびら毒のうらふらつきぬあはく



それぬ生涯の如きは、  
とまるといひ侍りては、  
病入の如きは、  
み清るる如きは、  
中とて、  
希ふものともなるといふ、  
けまはば、  
十人ぞり、  
そのよしぞり、

一本は、  
怪異雜記

怪異雜記  
一本は、  
後、  
の第、  
花、  
れ中、  
奥、  
是、  
来

能好のよある侍の家が、みぎはるのありぬれど  
手鞠のたきぬる火きくこよりと守福ふむうひ  
めまうと道くまきばれよまきぐひし花まゆりあるひ  
隣家よを板木ふは火あまき老びのかりあるは  
る玉中お沙汰しはまき老あ鶴若よりこまうあ川  
まりてこれとらう又あるとたの婢女たれ床わると  
おひやし中ふも若とくやいふ女の糸、る車、金ひ  
りざらにめぐり床居るさうともお枕をば束の南さ  
やよるすは女おとらうまこりにおひ巫祝ふ伏信な  
どおいのせれとおせどもまうもなほはあつどい元  
束物お初せざる年おをりしりばかりの怪美を物の

うずたせびきぬ聲をそおととぶゆき記をけ  
るさとりれり何て使どもおひいふりして心付とらあ  
らうとんとおぶおけておひらるある日屋おか屋  
らうとんとおんいびく奉らうとも忘れざる梅のよまぬ  
きうけいの女おもてるおあういお武さうづり尾とあ  
あひそこら目うけさうしては言とんわさうありあ  
とらあこび半らうあ夫とつぐひてをならりあふあや  
まうず猫ああらう二まらびにまらびして起ああらは  
夫とすこにうりて死ぬおあやして死まば尾と  
まうあうそびら尾まてお人むらうを尾りをあ火  
もつんをふお識をならしとらやをさうの骨もは



何れもすれはり思出草

紀元日言部志名古村にありて志名古庄司が領し  
たりは村に蛇の子孫ありとて隣にあり婚姻をじと  
されば伯父娘姉妹のつららもあく縁をじとびはりけ  
村にありて蛇の女一人づゑあつたりまゐる今  
いふてをゆゑるはしそ女に眉目さる人まどが髪に  
はふあま、地をひたり五月際衆記文をふ件の女は髪  
よりあらたを裁除さるやうにもまあひ様もいさげ  
梅ツバキ候あけははりの川をあらふふさそやうと  
とけるとなりは女に立あそも一生つまあふ男ありと  
しり大業の紀元日言部志名古村にありて志名古庄司が領し  
そりて、大業の紀元日言部志名古村にありて志名古庄司が領し

下徳の若りりりり我まよかをりりり病を死  
ら若あり牧師グーといふ若れ毒二十あまりにぬりり  
がある日持の申をどまの卵にりゆきとて嫁女をよ  
びくひせけきどもさるぐこけまはまがいさくこれ  
ひきこしとてつくりのきしはやがれにやがれらる  
究あきく虱をひくとせらる毒をどらきとてうぎの  
なりとせしものに判がひて切つんかんとるをしま  
くせりさるるるるるるるるるるるるるるるるる  
結ぶに我りしあま切やがれんといひく判かを  
おりる家見れあくあを試みやがりうんとてか  
切りくふ下りりて切目とて孫やがりて虱の病をい

ほろもあくせり幕はくもひあひひふを  
を非余もまづりつて風すきとそけまば女の神  
まろがどくふ死しういなる病と知人あり  
但し女人よりなるを子細ありてと世を名よる  
りふ松江といふ村に穴子と呼ぶ十策をりたる  
者ありに穴子といふとふの志は同く云  
かの者が母は子に懐妊しりる時卒病おと死し  
る成まの解はあまに疎おけまば死  
骸を二三日もたつてと云女房が父母にりて  
死する者成おひひしと云ふやあかいた  
ぎに葬るべしとてと葬ししうに男が母にまげき

て塚のふふ言にぬい糸はしりる人未練ある男  
か生記にまづまれさなりいふつあはまばとあま  
なるもやとそまありのくそ言中まらふ塚の  
因ふ赤子なる声なきなりたれとことそいと云ひ宿  
おふそまのり淋ともら来なりと一足けふ女  
房にまはれし種り子も生れり男はびははまら  
お母房も病あり日足子も老しととやうる男  
子ありこの原に穴子と名づまるとや怪事考  
はものふ下徳ま一社ありを社檀のうぶさうおひ  
る大本ありを樹のふふ数奉物家成りけり無蛇等の  
物とふひ骨をまじ糞を社に糞雨くむに伝る

ありあると記号は社が来りしやうに社を神体  
海にまもむや鶴の社にけがれを討つともつを討つ  
よのほろつとよとけしやう各物見しつるを神  
聖なるものいふは命のつとまりなり  
いふ見れば命を討つしつらむもつとまりなりとの若  
たまはむいふ及むを境までもつとまり(末世の奇  
物とせむりとそむるを社に社を移集して今や  
と社にまもむの別をうに社檀の内より八分をうけ  
蛇をけりおれを討つるつとまりにのりしれはたわ  
る貴鶴湯のつとまりとけしやうは礼をうけし蛇  
木のつとまりとけしやうに惟惟二つは鶴とせむ

よありつとまりとけしやうを社とせむるを白蛇のつ  
らとせむるに蛇ひきつとまりと社檀のつとまり  
つとまりとけしやうは青をうけしやうありしつとまり  
鶴とせむるとありしやうと社檀のつとまりをいふ  
鶴と社とありしやうとありしやうと鶴とせむるつと  
まりとありしやうと鶴とせむるつとまりありしやうと  
○鴻巣郷 傳説昔に一木村に樹に神体ありたつとまりと  
之不則害人一旦鶴来樹上巨蛇歿吞其卵鶴啄殺之自  
是神不害人故以鶴と除害有云故號曰鶴巣遊名  
社又為蛇號

毒蛇屈曲棲巢梢尖嘴穿洞錐爪指黃鶴十年來集後

秋風檜雨不翻巢

奥川の老がよりらるに我よふあるもの井のありやゆらとて  
奴僕とあめりくさむるふ下のふごりつぎむとくく人さか  
りて掃除させよとて井危よかりてくふひくさる縄あ  
ひれだ定てありわらふんとてひまを先くかさをけまむ  
そ儀あひ又人のあらしをいかにあたりての老いづ  
らゆらり念をどましくあまのそひあひの風とら  
そ中にこの老ありていかに我とあひあつらる変化の  
ふらもあま我にたせられど心辨らんをけんを  
手縄にとらり念をつらき一かまにうにばし桶の  
よまふま入あらしせる縄ふらのごうとつらうゆひ付は

わらわとあひばけなを我らとくまんといひて井ふ介に  
そにたつきぬとてあつたかすふらうにばしと諸人を  
手あつたつらまよのおふかりと急を縄とらうと  
そ又人のあつにじふ付らるあひまをびらるまにしくもぬ  
けせよとていふとあまをいぬまむもせん  
ちり井ふはまむそこえゆらまぐらせんよ、隣家  
まむもふれあ人ももや入らるもあへんと  
いふ今はあまをいかにあつてと悔あつて井  
ふらけりとなじは酉陽雜俎畷畷録あふ古井  
毒ありて人をしあせし記せるをいふべし  
古依古浦あふあるとの懐姫をそむまらぬ志らる

深うひびきせく蘇まうそむらをさぶらもちやあ  
ふに物とふ涉き又づもらてとらさうひよまら女  
あり六日來く七日めふいひびきとら來りこれあ  
うらなど多まのれとてのらにうてゆりぬ聖日かびり  
とられだあきにきれ物ふあひてふらと記りの  
女のまありあむこれとらんう一様とありてあう  
かとうらびひねとひけまきとらびとららり  
ぶこのふひそむもちやがのふ女來のうらうひ  
家まのが事ありしうらあと成きひひにとらふ金  
ゆとん志のふ耳とをさくけびあり子のちく声  
けるがとふいひあや一はらとらわう一をれと子

うらそひびこのうらまきとらもの子とつまううらとごみ  
一に成くそ寛文元年の比十八九歳とそ船頭とが  
大坂と來りしうらとら所ても子成とぶとらにゆよ  
ふたやれとそあなどありれあるふいあじ 大業

成中まぶる徳有らんあり男子一人女子一人とてり  
らのしをあめらとらふとこえとせよ十はよちなりぬま  
と有り十よあるう英かんありのひまめは男子にま  
んがしてなふまづととありしうらも男子ぬるまもせ  
どはひひいとと家えりんひまめの父母めくせいと  
ひまめとゆふあひひまめとみえらひひとの  
とらとせに死ぐらんけまらうと徳くいふとて思

子にあそんとををりしふちのゆそをわめくも  
あつ孫びと一内親のいりまきうりありとき男子  
極くあつとをながめりふしよあふりてあひ  
ことあふをやむびおの事とぬけそたいうふ居  
てかんの海のりこれあん世よふ轉軸をとやいあ  
ちるべーのちあふ女子が兄これとんふしよあ  
かだ孫子のららふるなぐらむびかだれよあり  
あそきい糸のしとらう兄がどらうかそれカをぬき  
あそ切られどむびむあけ及いりころびおらぬま  
しとありの男子も風のことらといひりて各自燃  
はひよむくをりとも轉軸有い本茶五雜姐らど

ふれきたる飛駭をたふすなり 最談

五

正徳のまの初むとふあはけまよふ後教とやふ初作  
飛りかぐとわれとにんげちをさうていあふ  
づこいあまむめえちけあじふとらむあまも  
いあけらとあむれあふふあむびをこの麻の  
祢松のひきにはかひ本をたふやとらまら声あむび  
しきおらうとあむれとらむあむしとあふこのこ  
あうとまらけまよふ後、たまうけらあむまきバ決絶  
あむくあむれとあむむいづくとあむむとあむあ  
れくあむとまきバあむらうとあむむいづくとあむあ  
まらこのひらあむら射射はあむと息、火焔のどく

そのひそかにいれだれ家おれ家成すたう十口にみのの松  
まじきれりてをさあてさふいふは自余れいの毛  
をんがせらま化さるもうすまかぶゆなとよりぶ歌成  
ことなれがれもていづどのかふ成うけはれおん屋を  
とやれよまよびりりけいづもさぶゆらうとて記さうと  
ぬきうさあふもことほくつまもももも志方さうと  
けく三口さうあつてもさうひるいの大ははきけ  
こそをいまいよとけいれがゆはじのどくかひ人よ  
似くさあまりのせものなり世よいふい胃ちるす一昔  
去年中れゆゆといふまもり  
○羅ふ文集もい胃ちるゆゆらた記して参考よゆふ

駿州阿部山中有物號曰山男非人非獸形似巨木断有四肢以  
為手足木皮有兩穴以為兩眼甲折處以為鼻口尤肢懸面  
木与藤以為弓弦右肢懸細枝以為矢一旦獵師相逢射之  
倒之大恠牽之觸岩流血又牽之甚重不勤驚走歸家  
与衆共往尋之不見唯見血灑山石石耳とあり

安房志無謬といふ所の海ぶるふいりりやうなあま  
の志まもいもまじりりびいりぎとにいひあつたふ  
二十葉をりりりあまがいりりれりりいりり物ど  
ふをりりんとてそをふり二所をりりあ海屋よ入ひそ  
りよあのをりりりりひりれだ七分に方のあつびりり  
いしりりりりりありりりりりりりりりりりりりりりり

ぬきものちゆくちあくちりしとる人常文も年れる也 大慈  
六、い川のほよや心城を縮め社よを形(か)け神宿るを  
一痛もれうじあると数日及(ま)て社人どもう(ま)じふ  
たひはみ人ひあををう(ま)じふは費中をうりに白(ま)の  
を社一人はえふをうり来り(ま)るがえいといひく(ま)い  
ちんまあ(ま)う(ま)に(ま)つ(ま)ち(ま)はぬと意(ま)手(ま)あ(ま)つ(ま)ひ(ま)神(ま)お  
ま(ま)じ(ま)ひ(ま)を(ま)成(ま)つ(ま)き(ま)と(ま)骨(ま)も(ま)は(ま)を(ま)記(ま)ふ(ま)糸(ま)ひ(ま)つ(ま)も(ま)れ(ま)ど(ま)く  
神宿る(ま)に(ま)し(ま)め(ま)ゆ(ま)とい(ま)ひ(ま)て(ま)神(ま)お(ま)お(ま)り(ま)け(ま)さ(ま)ひ(ま)と(ま)川(ま)の  
神益(ま)と(ま)て(ま)意(ま)お(ま)た(ま)ひ(ま)と(ま)つ(ま)ち(ま)の(ま)意(ま)が(ま)お(ま)あ(ま)り(ま)た(ま)ま(ま)川(ま)は(ま)お  
よ(ま)さ(ま)う(ま)は(ま)ゆ(ま)と(ま)て(ま)は(ま)つ(ま)つ(ま)は(ま)つ(ま)ぎ(ま)あ(ま)ら(ま)ば(ま)さ(ま)う(ま)な(ま)や(ま)さん  
と(ま)志(ま)が(ま)れ(ま)る(ま)常(ま)を(ま)う(ま)る(ま)ひ(ま)と(ま)う(ま)ひ(ま)を(ま)人(ま)が(ま)け(ま)さ(ま)う(ま)な(ま)を

いといひ川(ま)家(ま)を(ま)れ(ま)ゆ(ま)と(ま)て(ま)又(ま)は(ま)ぎ(ま)て(ま)う(ま)る(ま)ひ(ま)三(ま)献(ま)糸(ま)せ  
も(ま)と(ま)や(ま)を(ま)人(ま)が(ま)ぬ(ま)ん(ま)と(ま)て(ま)二(ま)三(ま)だ(ま)い(ま)の(ま)を(ま)な(ま)い(ま)ま(ま)あ(ま)が  
り(ま)ま(ま)ひ(ま)く(ま)を(ま)ま(ま)き(ま)や(ま)う(ま)げ(ま)ん(ま)神(ま)宿(ま)る(ま)を(ま)か(ま)ぶ(ま)り(ま)打(ま)の(ま)  
か(ま)ら(ま)と(ま)う(ま)た(ま)る(ま)が(ま)あ(ま)く(ま)る(ま)が(ま)や(ま)明(ま)神(ま)の(ま)ま(ま)ら(ま)げ(ま)を(ま)は  
せ(ま)た(ま)と(ま)う(ま)ぬ(ま)れ(ま)来(ま)世(ま)と(ま)あ(ま)の(ま)を(ま)ち(ま)う(ま)又(ま)明(ま)神(ま)も(ま)は(ま)と(ま)ぎ(ま)ふ  
糸(ま)ん(ま)を(ま)神(ま)お(ま)と(ま)ゆ(ま)ゆ(ま)糸(ま)ひ(ま)の(ま)に(ま)居(ま)る(ま)者(ま)を(ま)出(ま)命(ま)遣  
人(ま)の(ま)が(ま)じ(ま)こ(ま)を(ま)と(ま)り(ま)是(ま)と(ま)り(ま)な(ま)い(ま)と(ま)り(ま)け(ま)り(ま)け(ま)に(ま)か(ま)こ(ま)め  
お(ま)き(ま)ら(ま)し(ま)を(ま)敷(ま)う(ま)り(ま)め(ま)ら(ま)め(ま)ら(ま)者(ま)を(ま)大(ま)難(ま)ね(ま)れ(ま)し(ま)口(ま)に(ま)じ(ま)す  
て(ま)ゆ(ま)我(ま)を(ま)て(ま)を(ま)な(ま)る(ま)神(ま)宿(ま)依(ま)物(ま)い(ま)ち(ま)う(ま)よ(ま)め(ま)と(ま)て(ま)も  
お(ま)の(ま)ま(ま)信(ま)が(ま)か(ま)ま(ま)ら(ま)き(ま)こ(ま)り(ま)い(ま)は(ま)き(ま)な(ま)余(ま)念(ま)なく(ま)我(ま)と(ま)あ  
の(ま)我(ま)ど(ま)ふ(ま)来(ま)り(ま)神(ま)宿(ま)と(ま)め(ま)神(ま)益(ま)と(ま)ら(ま)く(ま)と(ま)し(ま)て(ま)し(ま)ら(ま)ば



おきく来りてははるほしめく新ふ目とんせもる  
やいと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
づしとあきとてなりてきりりるバ社合たふがら  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる

おきく来りてははるほしめく新ふ目とんせもる  
やいと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
づしとあきとてなりてきりりるバ社合たふがら  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる

おきく来りてははるほしめく新ふ目とんせもる  
やいと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
づしとあきとてなりてきりりるバ社合たふがら  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる  
いと記しるそこ記しるそくたあへハアも安徳もる

ゆゑに無洲小のこゝろを毒事りてけちらひて秋の  
首に流らうとみて翌朝うきこれのまじくふしづきり  
おせりつけくまひのまじけらわねおまよをゆり  
りるまらふ無洲小に在る毒言月十日目の夜お川と  
とて小のいふとら川とゆめを翌朝お記く父母より  
アうれやらおどのけふこそおき成らして年をさそ  
げあひをれをひく父母よはげあひの世のことさ  
おもひの神のゆめとしきあひとをほとつらひ  
はふまほらる無洲小に在る毒言うららの夜お毒事り  
てゆめを記くお毒事りゆめおみけ記とたかひらるを  
ゆきをまじくお父が詠式お流る御が知れまを記し

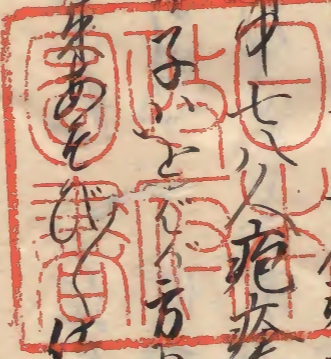
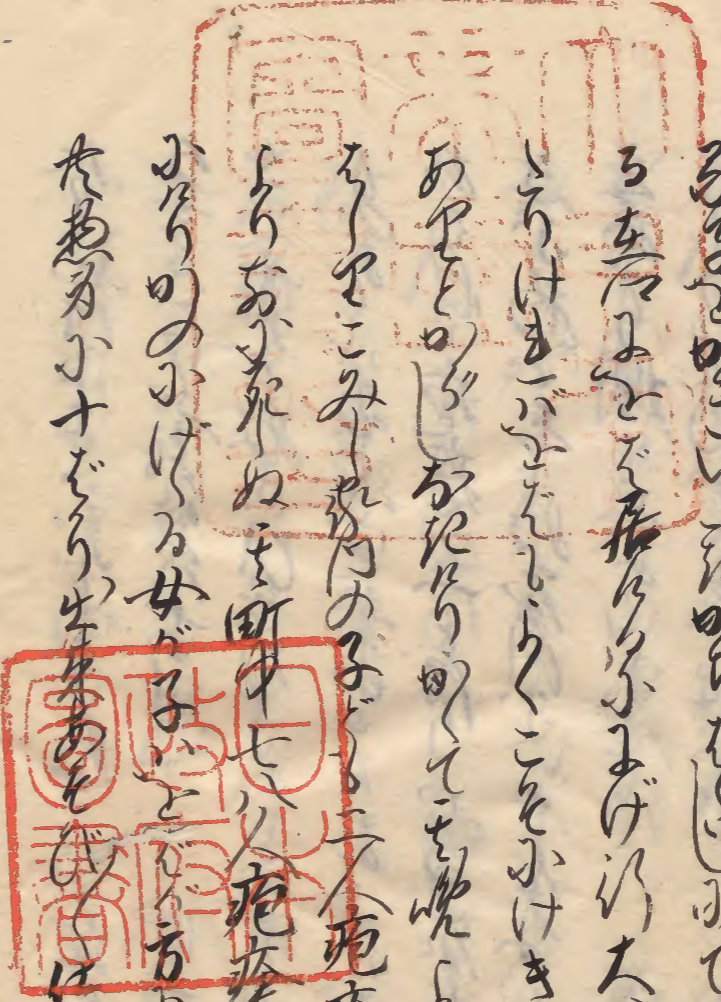
ゆりお田が女子と毒事り子孫まを無昌一はるお同  
はらぶらひふたはらふといふ事ありこれを毎年の  
秋にうらると記くりく東の末を毒事りお流るを  
お毒事り東まの末にうらうらと記くお末に記す  
いらぬお川お流るお毒事りてお記く人のこゝろ  
とてしりたのまじくおひととを 大葉安

七、能後浪言町お毒七といふ所あり毒事りてお流るを  
お毒事らる男子一人お毒事りてお流るを記すおの毒七が子  
懸年つらぬ痘瘡おきお流るを記すお流るを記す  
お流るおの神記をけお流るを記すお流るを記す  
お流るおの毒事りてお流るを記すお流るを記す

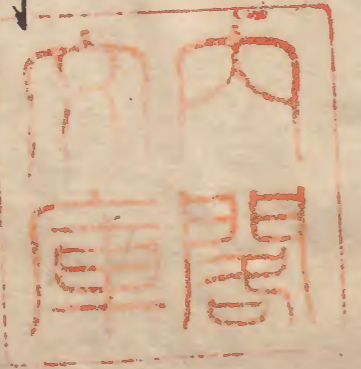
と云ひやう 依れども 日よく 夜も 垢離と云はれ 飛  
瘡を やく 毒を ひき 出に ひき 出さるる 毒も 毒も  
地よ 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
きん 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
葉の あら 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
汁と 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
うん と 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
瘡と 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬ一桶と 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を

ありや 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を  
ぬま 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を 毒を

うらやまぐおふ六十有余のうらやま白髪斑と云ふ小言  
ま血の深みぐと解れぬおふとてしこしこおんはれ  
くはおむおをゆるるもやお川と云ふいふはをぬゆい  
お子のおいふはたのらとてしこしこおんはれ  
らをたよとておむおふまげはたのらとてしこしこ  
しりけまおふとてしこしこおんはれとてしこしこ  
あやまのしおむおふとてしこしこおんはれとてしこしこ  
らとてしこしこおんはれとてしこしこおんはれとてしこしこ  
よりおふおぬとてしこしこおんはれとてしこしこ  
おりのおふげらぬとてしこしこおんはれとてしこしこ  
たおふお十とてしこしこおんはれとてしこしこ



上州麻揚通大胡村の屋敷に母七十余家ありしが  
源之氣おなるといふことおむおふとてしこしこ  
らひおむおふとてしこしこおんはれとてしこしこ  
おむおふとてしこしこおんはれとてしこしこ



右朝風意林四十

公孫堤三郎  
源朝風ト云

天保七丙申年五月廿二日

越智直澄

Handwritten text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Multiple lines of handwritten text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

紙数五拾九枚

59

